日本における英和辞書発達小史

井　田　好　治*

The Evolution of English-Japanese Dictionaries in Japan

Yoshiharu IDA*

1. 辞書の分類
2. 蘭日・日蘭辞書の発達
3. 英和辞書の発達（明治前半期）
4. 英和辞書の発達（明治後半期）
5. 英和辞書の発達（大正期）
6. 英和辞書の発達（昭和期）

1. 辞書の分類

1.1 「ことば」(word) に関する知識・情報を取り扱う書物を辞典 (dictionary) といい，「ことがら」(thing) に関する知識・情報を取り扱う書物を事典 (encyclopaedia) という。

個々の辞典を総称的にいうときは「辞書」を用いる。辞書は，個個のことばを，一定の観点から（多くの言語ではアルファベット順に）整理配列して，正書法 (orthography)・発音・語義・用法・類義語・語源などを記述した書物といえる。記述のために用いられた言語が，見出し語 (headword, entry word) と同一の言語である場合は，国語辞書（たとえば「英英辞書」と称するように）となり，他の言語である場合は，対訳辞書となる。前者を 'monolingual dictionary' といえば，後者は 'bilingual dictionary' といえるし，数か国語が用いられた場合は 'polyglot dictionary'（多国語対訳辞書）となる。辞書はまた，その言語で普通使用される全語彙を集録し記述することを目的とする一般辞書 (general dictionary) と，特定の専門領域における語彙・事項についての知識を記述することを目的とする特殊・専門辞書 (dictionary of special subject) とに分けられる。たとえば，発音辞書，熟語辞書・諺辞書・俗語辞書などは後者の例である。

以上，常識的に行われる「辞書」についての考え方を述べたが，歴史的な実在物としての個々の辞典そのものには，「ことば」を取り扱うと同時に，事典的・百科全書的内容をも含むものが多く，実用的な便宜性が優先しているといっていい。

1.2 日本の英語辞書に付けられた名称はさまざまであって，「和解（わげ）」「語林大成」「語林

* 英語教室 (Dept. of English)

集成」「字彙」「語箋」「韻府」「通語」「対訳辞書」「和訳辞書」「和訳辞林」「英和辞海」「英和字典」と見える。「辞典」が一般化するのは明治後半期に入ってからである。この時期は，日本の英語学発達史の面からみれば，斎藤(秀三郎)文法，ネスフィールド (J.C. Nesfield) 文法および神田 (乃武) 文法の流行の段階に照応する。ことばの規範的正用法を重視する文典の時代が，ことばの用を正す典拠としての「辞典」を意識的に求めたと考えられる。

日本の英語辞書の発達を，通時的にみて行くとき，先行辞書資料の質的量的利用の上に新しい辞書編集 (lexicography) 作業が行われていることは自明の理であるが，それにも劣らず，いなそれ以上に，英米で刊行された英語辞書のおよぼした影響が大きいといわなければなるまい。人文・社会および自然科学の各領域でも，西欧文化の諸業績が即時に吸収消化され，日本文化に特徴的な折衷的性格を作りあげているものと思われるが，このことがきわめて象徴的・端的に，日本の英語辞書編集史の上にあらわれているのに気づく。

かの重厚な学風をもって知られる Henry Cecil Wyld (1870-1945) が，みずから編修した *The Universal Dictionary of the English Language* (1932) に 'dictionary' を定義して

> That which is compiled; mass of material brought together from many sources; esp. a book composed of material taken from others; a dictionary is largely a compilation from the works of others. (ただし意義区分 2.)

といっているのは，辞書編集の本質を巧みに突いているとともに，Samuel Johnson が 'Lexicographer' に与えた定義 'a writer of dictionaries; a harmless drudge, that busies himself in tracing the original, and detailing the signification of words.' にも優るとも劣らぬ皮肉なひびきを伝えている。

2. 蘭日・日蘭辞書の発達

2.1 対訳辞書としての西欧語辞書が，日本ではじめて印刷されたのは，吉利支丹版と呼ばれる 1595 (文祿 4) 年天草コレジオ刊行の *Dictionarium Latino-Lusitanicum ac Iaponicum* である。これはポルトガル語と日本語の説明を付けたラテン語辞典であった。次いで 1603 (慶長 8) 年，長崎コレジオ刊「日葡辞書」(補遺は翌年刊) があり，そのポルトガル語タイトルは次のとおり印刷されている。

> VOCABVLARIO/DA LINGOA DE IAPAM/com a declaração em Portugues, feito por/ALGVNS PADRES, E IR/MAÕS DA COMPANHIA/DE IESV. (イエズス会のパードレおよびイルマン数名の編纂に成り，ポルトガル語にて説明を附したる日本語の辞彙)

これらは，Jesuit の修道士が宣教のため当時の日本語を習得するための必要な辞典であったが，今では室町時代の日本語の研究に不可欠の資料となっている。→土井忠生 (1971)

1609 (慶長 14) 年通商を許されて平戸に設けられたオランダ商館は，1641 (寛永 18) 年長崎出島に移る。交易上の実用に発した長崎通詞の蘭学が，西欧諸科学移入の学問段階にまで高まるには，『蘭学事始』にみられるようなエネルギーが必要であった。こうした知

的努力が辞書の形態に結晶化するのは当然のことで，青木昆陽『和蘭文字略考』(1746 (延享 3) 年以前に成る) は，最初の日蘭対訳主題別類語集 (vocabulary) といえよう。主題別 (subject-heading) とは，語の意義によって部門別に分類してあるわけで，これは，ヨーロッパ中世期における羅英類語集の伝統的手法と一致し，辞書発展史上，東西軌を一にしている。→林哲郎 (1968) pp. 49-76. *OED* の 'dictionary' の項に見出される次の記述は，この語の初出例でもあり，このことに関連性がある。

> *Dictionarius* was used *c* 1225 by Joannes de Garlandia, a native of England, as the title of a collection of Latin vocables, arranged according to their subjects, in sentences, for the use of learners;

1798 (寛政 10) 年刊森島中良 (＝桂川甫斎) 撰『類聚紅毛語訳』(後に『蛮語箋』と改題) は，この種の類語集の好例で，意義部門別に分類された日本語の下に片仮名がきのオランダ語が置かれている。語数は 2,103 語である。→鈴木博 (1968)

四か国語対訳類語集といえる村上英俊『三語便覧』(初巻 1854 (嘉永 7) 年刊) によって，部門別の組織の例を示す。(所収語数約 3,500 語)

初巻—天文・地理・身体・疾病・家倫・官職・人品・宮室・飲食・衣服・器用

中巻—兵語・時令・神仏・徳不徳・禽獣・魚虫・草木・果実・金石・医薬・采色・数量・地名

終巻—言語 (陪名詞・附詞・前置詞・附合詞・動詞)

例.「天文」の部から冒頭の 5 語を引く。

	佛蘭西語	英傑列語	和蘭語
天地既成	chaos	chaos	mengelklomp
物	matiere	stuff	stoffe
自然	nature	surely*	natuur
全世界	univers	universe	heelal
世界	monde	world	wereld

(鹿児島大学蔵玉里文庫本による)　　* 英俊の誤解

2.2 江戸および長崎における組織的な蘭学研究に役立った舶載の蘭仏対訳辞典がある。François Halma: *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen/Dictionnaire*

Flamand et François (Amsterdam; Utrecht) である。この辞典を底本として，1796 (寛政 8) 年，稲村三伯，石井恒右衛門，安岡玄真 (＝宇田川榛斎) の協力で，『波留麻和解』(通称『江戸ハルマ』) が成稿刊行された。江戸版と関西版 (泉州版) がある。語数約 64,000 を収載。江戸版 30 部は，見出し語のオランダ語を木活字で印刷し，その右側に訳語を書き入れたもの。大槻玄沢は本書を「東西韻会前蘭後蘇 [＝和]」と名づけたが，この名称は用いられなかった。

一方，長崎ではオランダ商館長 Hendrik Doeff (1777-1835, 長崎滞在は 1800-17) を中心として，蘭通詞 11 人の協力の下に，Halma の第 2 版 (1729) を底本として，蘭日対訳辞典の編集がすすめられた。初稿 1811 (文化 8) 年，浄写第 2 稿文化 13 年，完成稿は，Doeff 帰国後の天保 4 年 (1833) のことであった。これを『道富ハルマ』又は『長崎ハルマ』と呼んでいる。収載語数約 112,000 語。

『江戸ハルマ』も『長崎ハルマ』も，見出し語のオランダ語に付けられたフランス語を和訳することによって出来上ったものにちがいないが，その訳語に，前者は漢語的表現を好み，後者は「此書の訳語は直に長崎の方言を取る。是通詞家の老幼ともに通暁し易からん事を欲すればなり」(同書の「緒言」より) とあって，口語的表現を好んで取り入れている →永嶋大典 (1970) pp. 10-36. 板沢武雄 (1959) pp. 212-230.

『江戸ハルマ』の縮約版として，文化 7 (1810) 年京都の蘭学者藤林淳道 (普山) 撰『訳鍵』100 部が刊行された。収載語数約 27,000. 同書の「凡例」に，蘭学研究上，辞書の必要性を痛感した淳道の 'acknowledgement' が述べられている。

「惟フニ榛齋子及予等。各嘗テ幾多ノ西書ヲ訳稿シ。斯業ヲ世ニ公明スト雖トモ。必竟喝蘭 [オランダ] 医学ノ興ルハ。蘭化先生 [前野良沢] ノ沈研ニ剏リ。海上老師 [稲村三伯] ノ篤志ニ成ル。右云。本立而道生ト。蓋シ二哲ノ謂歟。」

『訳鍵』は文政 7 (1824) 年に再刊，さらに安政 4 (1857) 年には大野藩士広田憲寛によって『増補改正 訳鍵』が出されて，蘭学者の間に重宝されたというが，それほど辞書に対する需要が大きかった証拠である。

蘭日辞典編集の総決算として，幕末最大の事業は『和蘭字彙』(約 1,880 丁) の刊行である。将軍侍医桂川甫周を 'editor in chief' として，安政 2 (1855) 年に始まり，同 5 年に完了した。『長崎ハルマ』を校訂し印刷に付したものといってよい。収録語数もほぼ同数である。ただし英和対訳辞書 (特に 1862 年刊『英和対訳袖珍辞書』) の訳語に与えた影響は大きく，蘭和から英和への接点として重要な意味を持つ。

2.3 日蘭対訳辞書としては，成立年は不明であるが『蘭語以呂波引』(写本. 鹿児島大学蔵玉里文庫本) のような単語集が存在する。イロハ順に配列された日本語を右欄に，それに相当する仮名発音付き蘭語を左欄に記して，索引するようになっている。語数 854 語。前にあげた『蛮語箋』も，見方を変えれば主題別日蘭対訳語彙集といえるであろう。

これらに比べれば文化 7 (1810) 年江戸刊行の中津藩主奥平昌高編『蘭語訳撰』 *Nieuw Verzameld Japans en Hollandsch Woordenboek* は，はるかに整った日蘭辞典といえる。

蘭学界の逸材馬場貞由の蘭文序によれば，馬場が資料を提供し，中津藩士神谷弘孝が浄写し，奥平侯が編集した，とある。『蘭語訳撰』は，収録した日本語 7,072 語をイロハ順に並べ，さらにそれぞれを 19 の意義部門（天文・地理・時令・数量・宮室・人品等）に分類して，蘭語を対置する，という手順で出来上っている。→鈴木博 (1968)

次の引用例はこれを示す。

(伊)	
(文天)	
Ondergaande zon	納日（イリヒ）
Donder	雷（イカヅチ）
Blexem	電（イナビカリ）
Noord west	乾（イヌイ）
(理地)	
Hout brug	板橋（イタバシ）
Vreemde land	異国（イコク）

同じ中津藩の蘭医大江春塘の名で文政 5 (1822) 年江戸刊 *Bastaardt Woorden Boek* (2 巻 2 冊) というオランダ語中の「外来語」を見出し語として日本語訳を付した特殊辞典が出ている。

この底本は舶載の L. Meijers: *Woordenschat* [= thesaurus of words] の第 1 部 Bastaardt-Woorden である。

3. 英和辞書の発達（明治前半期）

3.1 英学の創建は，長崎における蘭通詞の語学研究が，ある程度組織だった状況に達していたことを前提条件として行われた。現存する英語研究最初の成果は，本木庄左衛門正栄 (1767-1822) 訳述『諳厄利亜興学小筌（あんげりあ せん）』（長崎本の題簽は「諳厄利亜国語和解」写本 10 巻）である。その巻之一から巻之三は，乾坤・時候・数量・官位人倫人事・支体・気形・器財・服食・生植・言辞の 10 部門に意義分類された主題別対訳類語集である。収載語数約 2,400 語，すべての英単語に朱書縦書きで発音を示す片仮名をふり，縦書きの日本語訳字が添えてある。この写本の成ったのは，文化 8 (1811) 年 9 月のことであるが，続いて文化 11 年の夏，日本ではじめてのアルファベット順に配列された英和対訳辞典が出来た。『諳厄利亜語林大成』（写本 15 巻）である。収載語数 5,910 語。

A 之部	
A	冠詞又一ヒトツ
To abandon	廃スル放捨ミステル
To abase	賤見又貶サガルヲツル
To abate	減ケンスルヘル
Abbot	官名

(大槻文庫本による)

引例の示すとおり，1 語定義 (one-word definition) か，同義語畳用による対訳英和単語集 (wordbook) であるが，すべての英単語に発音が与えられていることは注目に値いする。長崎原本には英語のほかに同義語のオランダ語が添えられ，三か国語対訳の形態を取っている。

英国の辞書発達史上で，1604 年刊の Robert Cawdrey: *A Table Alphabeticall, contayning and teaching the true writing, and vnderstanding of hard vsuall English words, etc.* が，収録語数約 3,000 語，英国最初の英語辞典の名誉をになうとすれば，本木正栄，吉雄永保，楢林高美など『語林大成』の編者たちにも，その栄誉が分かち与えられてもよかろう。ちなみに *A Table Alphabeticall* の A の項のはじめは次のとおりであって，素朴な内容なのである。→林哲郎 (1968) pp. 142-146.

ʃ*Abandon, cast away, or yeelde up, to leave, or forsake.
Abash, blush.
abba, father.
ʃ abbesse, abbatesse, Mistris of a Nunnerie, comforters of others.

(* ʃ は French origin を示す印。J. C. Gray (1963) p. 37 から引用。)

『語林大成』の訳語が，後続の英和辞書に与えた影響度，および特徴については永嶋大典 (1970) pp. 37-51 参照。「諳厄利亜」の読み方について，『蘭語訳撰』(文化 7 年) で「諳厄利亜」と振っていることを付記しておく。

3.2 文政年間 (1818-1829) は英和辞書の新しい編集は行われず，わずかに文政 8 (1825) 年水戸藩で『諳厄利亜語林大成』を転写したものと思われる『諳厄利亜辞書』(水戸彰考館本，戦災で焼失) があった。これが英学史の通説である。しかしながら，文政年間はまた Philipp Franz von Siebold の日本滞在の時期 (1823-1828) にも当る。この間に，Siebold の教えを受けた吉雄権之助永保 (1785-1831) を中心として，英語研究が継続された証跡がある。

一は『英吉利文話之凡例』(写本 2 巻，文政 11 年?) と称する英・蘭・漢 (中国語) 対

訳の語・句・文の用例集である。→杉本つとむ (1976) pp. 923-940) 他は『模理損字書」(佐倉本) または『漢訳和蘭字典 五車韵府』(高鍋本) と名づけられている蘭・英・漢三か国語対訳辞典の存在である。この両書の底本または情報源として，Robert Morrison: *A Dictionary of the Chinese Dictionary* (3 parts in 6 volumes, Macao, 1815-1823) の Part III, *English and Chinese* が用いられていることが明らかである。*English and Chinese Dictionary* の刊行は 1822，わが文政 5 年である。この蘭英漢三か国語対訳辞典の編集は，文政 6 年～同 11 年 (『英吉利文話之凡例』の推定写本年) の間と考えられ，ちょうど Siebold の滞在期間と一致する。中国語を媒介項としての 'lexicographer' の編集作業には，三か国語についての相当の語学力を要求されるが，吉雄権之助とその協力者たちには，これに応ずるだけの用意があったとみていい。→ 井田好治 (1977)

例:『英吉利文話之凡例』9 丁目表

二個字頭相連成語之表
examples of two letters forming a word.
voorbeelden van twee letters vormende een woord.
am, ben, 是. 在. /an, een, 一個. /as, als, 如. /at, op, in, 至. 到. /be, zijn, 是. 在. /bij, door, 以. /do, doen, 做. /go, gaan, 去. 往. /he, hij, 他. 指男之他字.

例:『漢訳和蘭字典五車韵府』1 丁目表

aafsch, awkward,	拙的，手拙.
aal, m. eel,	鰻魚.
aalmoes v. alms,	週済之物．(以下蘭文の用例は省略)
aanbeeld, o. anvil,	砧.
aanbei, v. hemorroids [*sic*]	痔瘡.
aanbidden, adore,	拜神，欽崇，崇；服事；供神.
aanbeiden, offer,	奉献.
aanboord, aboard,	船上.
aanbringen, bring,	帯来.
aandachtig, attentive,	用心的；勤慎的.

3.3 安政開国後の英学勃興の勢いに応じて，1862 (文久 2) 年堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* [*sic*] が洋書調所から刊行された。底本は H. Picard: *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages* (1857²) の英蘭の部で，対訳の蘭語を，主として『和蘭字彙』(1858 完成) の訳語によって翻訳し置き換えることで出来上った。編集の手続は Morrison の英漢辞典を利用した場合と同じである。収録語句数約 35,000 (→町田俊昭 (1971)) 初版は 200 部，慶応 2 (1866) 年堀越亀之助編開成所刊行の「改正増補」再版は千

部発行。初版は活字出版による英和辞書の最初のもので，後述の「薩摩辞書」の流布を通じて明治 20 年代近くまで影響を与えた点で，英語辞書史上の意義は大きい。つまり『長崎ハルマ』→『和蘭字彙』→『英和対訳袖珍辞書』初版→「改正増補」再版→「薩摩辞書」という図式による訳語の継承関係に注目したい。→惣郷正明 (1973)

初版の前付けの「略語之解」に，それまでの蘭語学研究の結実たる文法用語が示され，それが現在に及んでいることを紹介しておく。

adj. 形容辞　adv. 副辞　art. 冠辞　conj. 接続辞　interj. 間投辞　irr. 不規則　part. 分辞　pl. 複数　prep. 前置辞　pret. 過去　pron. 代名辞　reg. 規則　s. 実名辞　v. a. (=verb active) 他動辞　v. n.(=verb neuter) 自動辞

慶応 2 年の再版には，新たに「不規則動辞表」ABBREVIATIONS EXPLAINED, ARBITRARY SIGNS「象形記号之解」が加えられ，そのまま「薩摩辞書」に受け継がれている。

3.4 明治前期を代表する英和辞書のひとつは通称「薩摩辞書」，正式のタイトル『改正増補和訳英辞書』*An English-Japanese Dictionary*, 1869 (明治 2) 年 Shanghai: American Presbyterian Mission Press 刊，「日本　薩摩学生」編 (英文 Preface では A Student of SATSUMA と記す) である。事実は『英和対訳袖珍辞書』の慶応 2 年「改正増補」再版を親本とした 'Third Edition Revised' で，薩摩出身の英学生高橋新吉 (良昭)，前田献吉 (正穀)，その弟正名が編者である。多少の改訂増補のある点は別として「薩摩辞書」の特徴は，①英語見出し語のすべてに片仮名による発音標記を与えたこと，②訳語の難しい漢字に読み仮名を振ったこと，にある。幕末・明治初年の英学研究の実状をふまえて判断すると，3万語余りの英単語発音辞典たることを期した彼等の功績は認めねばなるまい。大正末期以降 D. Jones の *English Pronouncing Dictionary* の発音記号を転写して足れりとする作業と，Webster 式注音符 (diacritical marks) に関する情報以外には拠るべきもののない場合の発音標記の困難さを思うべきであろう。ちなみに原本 Picard の辞典には発音は示されていない。ただし John Walker の *Pronouncing Dictionary and Exposition of the English Language* (rev. ed., 1863) は当時舶載されてはいる。

明治 4 (1871) 年「薩摩辞書」の再版『大正増補和訳英辞林』*An English and Japanese Pronouncing Dictionary*, Fourth Edition Revised が出た。印刷は同じ上海美華書院である。序文に「前本ニハ英語ノ傍ニ片仮名ヲ以テ口調ヲ施スト雖モ音声ノ高下及ビ字綴ヲ明辨スル能ハズ　故ニ今片仮名ヲ省キウエブストル氏ノ辞書ニ拠テ是ニ易ルニ音符(エキセント)並ニ字綴(シレブル)ヲ以テス」とある。タイトルに *Pronouncing Dictionary* とつけた所以である。前付けの 'Key to the Pronunciation' 音調基表から例を示す。

Ā, ā, *long*, as in.....Āle, Fāte, Chāmber.
Ă, ă, *short*, as in.....Ăddd, Făt, Hăve.

Â, â, as in.....Âir, Shâre, Pâir.
Ä, ä, *Italian*, as in.....Ärm, Fäther, Fär.
Ȧ, ȧ, as in.....Ȧsk, Grȧss, Dȧnce.
A̤, a̤, broad, as in.....A̤ll, Ta̤lk, Ha̤ul.
Ạ, ạ, like short *o*, as in.....Whạt, Wạnder, Wạllow.

見出し語の例: A-băn′don-ment, Bĭb′li-ŏg′ra-pher, Ꞓol-lō′qui-al-ĭsm, De-mŏ-ꞓ′ra-çy, Ĕt′y-mŏl′o-ġy, Fan-tăs′-ti-ꞓ-al-ness.

明治 4 年版「薩摩辞書」の復刻本は明治 20 年ごろまでしきりと出版されたが，全く別のタイトルをつけて出たものも多い。たとえば『英和対訳辞書』(通称「開拓使辞書」東京，明治 5 年)，『広益英倭字典』(加賀，明治 7 年) はそれである。

Noah Webster の *The Elementary Spelling Book* は，幕末から明治中期に至るまで，英学入門書として，さかんに用いられ復刻版もたくさん出まわったが，これは「薩摩辞書」再版が広範に普及した時期と一致する。両者の流行は相互に因果関係を成したものと考えられる。→井田好治 (1963)

3.5 「薩摩辞書」とならんで明治前半期を代表し，近代的訳語の源泉として後続の英和辞書に大きな影響を与えたものは，柴田昌吉(まさよし)・子安峻編『附音挿図英和字彙』明治 6 (1873) 年横浜日就社刊. *An English and Japanese Dictionary, Explanatory, Pronouncing, and Etymological, containing All English Words in Present Use, with an Appendix, by M. Shibata and* T. *Koyas, Illustrated by Above 500 Engravings on Wood*. である。

収録語数約 55,000，前付けに「緒言」Key to the Pronuniciation (音用之解)，Abbrivations Used in This Dictionary (編中所用之略語) があり，本文 1,387 頁，附録に「不規則動詞表」「略語解」「象形記号之解」(Arbitrary Signs)—ここまでは慶応 2 年版『袖珍辞書』したがって「薩摩辞書」と同じ—，「附音近代地名集」「図解」(Pictorial Illustrations)，総頁 1,548。

「附音」の例: (見出し語のあとに括弧に入れて示してある) a-ban′-dun-ment, bib-li-og′ra-fër, kol-lō′-kwi-al-izm, dē-mok′-ra-sy, et-i-mol′-o-ji, fan-tas′-tik-al-nes. (「薩摩」(明 4) とは方式が異なる点に注意)

題名中の 'Etymological' は，本書の語義通り，「字学(ジガク)ノ。文字用法ノ」(「薩摩」明 2「文字(モジ)ノ用法(モチイハウ)ニ係(カカワリ)タル」明 4「文字(モジ)ノ用法(ヨウハウ)ノ」) というほどの意味であって，品詞名・名詞の単複・動詞の活用形と自他の区別等が示されていれば充分なのである。'Etymology' 3. *Gram*. That part of grammar which treats of individual words, the parts of speech separately, their formation and inflexions. (*OED*) の語義に従った用法である。

『英和字彙』が底本として用いたものは，英国人 John Ogilvie (1797-1867) 編集の辞書であった（緒言）。

D. N. B. によるとオッグルヴィは，1838 年から Webster の *An American Dictionary of the English Language, 2 vols.* (1828[1]) の改正増補に当り①*Imperial Dictionary* (1850)，その縮約版②*Comprehensive English Dictionary* (1863)，その後③*Students' English Dictionary* (1865)，とその簡約版④*English Dictionary, Etymological, Pronouncing and Explanatory, for the Use of Schools* (1867) の 4 種の辞書を出版した。①②③には木版画による図解が挿入され，②③には '*Etymological, ...*' なる epithet がつけられている。②の発音を監修したのは Richard Cull とある。

柴田・子安は，Ogilvie 辞書の諸特徴を取り入れたばかりでなく，英文タイトルにも借用したわけである。二人の辞書編訳の仕事は明治 3 年の春から始まったと「緒言」にあるが，*Comprehensive English Dictionary* を利用した可能性が大きい。→岩崎克己 (1935) pp. 69-80.

『英和字彙』初版の訳語には，漢語的表現が著しく，その主たる補給源は W. Lobscheid: *English and Chinese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation*, 4 vols. (Honkong, 1866-69) の漢訳語であった。この大冊の英華辞典は，近代的訳語の形成に与えた影響は大きく，明治 12 年津田仙・柳沢信大・大井謙吉訳『英華和訳字典』(3 か国語対訳辞典)，明治 16～17 年井上哲次郎訂増『英華字典』として翻刻利用されている。『英和字彙』の見出し語の約 50% がこの英華辞典の影響を受けているという。→森岡健二 (1965)

ロプシャイトの漢語を利用した先例は，明治 5 年刊の吉田賢輔他編『英和字典』に採用された訳語である。発音が「薩摩辞書」明治 4 年版と同様な Webster 式注音符で示されている点からも先駆的といえる。原本は P. A. Nuttall: *Standard Pronouning Dictionary* (London)。

『附音挿図英和字彙』の第 2 版は「増補訂正」を冠して明治 15 (1882) 年に出る。語数 1 万，挿図百余を加える。この間に井上哲次郎編『哲学字彙』初版明治 14 年が出版された。明治初年から大車輪で移入された西欧諸科学が漸く消化され始め，学問の諸分野における学術的専門用語の確立が証明されたひとつの象徴的出版物であった。『哲学字彙』そのものもまた，幕末・明治維新以来の「先輩之訳字」を採り，「儒仏諸書」を参考にして新訳字を提示するという折衷的 'compilation' なのである。当然，辞書とは相補的関係にある。「学術専門語」「論理的抽象語」について，『英和字彙』第 2 版はこれを積極的に吸収した。→永嶋大典 (1970) pp. 94-119. これが明治後期の諸英和辞典へ承け継がれ，近代訳語として成立して行くプロセスは重要である。『英和字彙』系統には，『英和対訳大辞彙』(嶋田三郎校訂，市川義夫纂訳，明治 18 年)『英和対訳大辞彙』(前田之敏訳，明治 18 年)『英和正辞典』(滝七蔵纂訳，明治 18 年)『懐中英和辞林』(高田早苗校閲，吉田直太郎纂訳明治 21 年) などがあり，『英和字彙』の復刻版も広く流布した。

4. 英和辞書の発達（明治後半期）

4.1 『英和対訳袖珍辞書』系と『附音挿図英和字彙』系との二大潮流が，明治前半期の英和辞書を支配した歴史的状況を，ややくわしく述べた。この両系統とは別に，後の英和辞典の訳語・語義・区分・解説の方法に大きな影響を及ぼしたといわれる尺振八編『明治英和字典』*An English and Japanese Dictionary, for the Use of Junior Students by Sekey Shimpachi. with the Addition of New Words and Their Definitions, Together with A Biographical Dictionary* (六合館刊，1884-1889. 1,270 頁) が明治 22 年に，足かけ 6 年で完成した。底本は *Webster's National Pictorial Dictionary* (Springfield: G. & C. Merriam. 1883) であったらしい。もちろんこの辞書は Webster 没後の後継者の手に依るものである。Webster 系の近代的 lexicography が，尺振八の語学力によって充分に消化され，忠実に訳述の中に紹介されたとみるべきであろう。『明治英和字典』は原書の正確な理解と適確な訳語の選定にすぐれた編者の産物であった。しかし発音標記の欠けているのは，歴史的には後退であろう。

4.2 明治 20 年代，30 年代にわたって広く用いられた二つの英和辞典が，底本を共通にしながら，相ついで生まれた。ひとつは島田豊纂訳『附音挿図和訳英字彙』(明治 21 年大倉書店) *An English and Japanese Lexicon, Explanatory, Pronouncing and Etymological, Containing All Words in Present Use, with an Appendix* (英文タイトルはなんと柴田の『英和字彙』のものそっくり同じである) で，'Illustrated with Above 700 cuts' とあって「附音挿図」と冠したわけである。

Arthur Lloyd (1852-1911) が Preface を寄せて 'The basis of this Dictionary is Webster's Unabridged Dictionary,...It contains about 80,000 words, all of which, as well some words extracted from the Supplement of that Dictionary, have been translated into Japanese.' と当時の辞書作りの楽屋裏を物語っている。

Webster を訳出したものであるから，当然百科全書的で，学術専門語・事物の正確な翻訳紹介がこの辞書の特徴ともなっている。前付けの「綴字法ノ指引」「発音ノ指引」「発音ノ解」は *Webster* に依ったものだが，さらに「発音法 Phonotypy」解説が 10 頁，発声器関の図解とともに載っているのは，英語発音教育史上注目に値いする。附録は，「薩摩」明治 4 年版に 'List of Familiar Phrases, Proverbs, Maxims, Quotations, and Mottoes, from the Latin, French and Italian Languages' (21 頁) と「印刷校正記号之解」1 頁が加わっている。本文 932 頁。本書は明治 42 年迄に 3 度訂正増補され，34 版に達している。島田豊には別に『双解英和大辞典』(共益商社，明治 25 年) がある。*Webster* の語義をそのまま採り，これに『和訳英字彙』の訳語を加えたものであるが，'bilingual principle' にもとづく辞典として版を重ねた。

『和訳英字彙』とならんで，明治 21 年イーストレーキ・棚橋一郎共訳『ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙」(三省堂) *Webster's Unabridged Dictionary of the English Language, Translated into Japanese by a Committee and Edited by F. Warrington Eastlake, Ph. D., and Ichiro Tanahashi, Bungakushi.* が出版された。

底本も同一で，書名もよく似た辞典が奇しくもふたつ出揃ったわけである。内容も酷似しているのも当然で，先行英和辞書の訳語が大量に流れこんでいるし，また全くの引き写しも存在する。明治 28 年の 26 版は，南條文雄増補後のものだが，本文 1,280 頁，Supplement 276 頁，Appendix 282 頁（内容は『再訂増補和訳英字彙』にほぼ同じ）から成り立つ。'Key to the Pronunciation' は前付けに載っているが，綴字法・発音法などはない。Appendix に 'A Vocabulary of Prefixes and Suffixes' (11 頁) が収めてあるのは，語の分析に関心を示したものとして，注意を引く。明治 43 年 10 月には 57 版に達している。島田豊と同じく，棚橋一郎に『英和双解字典』(丸善商社，明治 18 年）があり，P. A. Nuttle: *Standard Pronouncing Dictionary* (London) の語義に柴田の『英和字彙』再版の訳語を添えたものといってよい。『英華和訳字典』(明治 12 年）を別とすれば，「双解」辞典のはしりである。

4.3 同じ三省堂から明治 35 (1902) 年神田乃武・横井時敬・高楠順次郎等編『新訳英和辞典』*An English-Japanese Dictionary* が出版された。これは学術専門語・事物・事柄について，百科事典的情報の正確を期すという方針から編集されたものであった。明治 44 年に出て大正期に大いに用いられた神田乃武他 11 名（医学・工学・理学・法学・海軍など各分野の専門家）編『模範英和辞典』*Sanseido's English-Japanese Dictionary* は，前者の百科事典的性格をさらに発展させるとともに，文法的機能を果す語類（冠詞・助動詞・前置詞・接続詞・関係詞など）の用法・例句・例文を充実させた。語義の配列も，意義区分に従って記されている。

例:

Hū-măn′i-ty, *n*. ㊀人性，人格，人情，人道。㊁人類。㊂仁，情（ナサケ），仁愛，仁慈。㊃pl. 文学。

発音表記は，「センチュリ，スタンダード，ウェブスタ及オックスフォード英語辞書等」を参照したとあるが，これはそれぞれ W. D. Whitney, *et al.*, eds.: *The Century Dictionary*, 6 vols. (New York, 1889-91), I. K. Funk, *et al.*: *A Standard Dictionary of the English Language*, 2 vols. (New York, 1893-94), *Webster's International Dictionary of the English Language* (1890), および当時刊行中の *NED* を指すものと考えられる。特に挿図は「センチュリー」から採られている。→永嶋 (1968) pp. 300-302.

5. 英和辞書の発達（大正期）

5.1 明治の lexicography の到達点を示し，かつは伝統的語学研究の象徴的な結晶として，明治 45 年即ち大正元年 (1912) に，これまでの Webster 系の百科事典的性格から脱皮した'ことば'の dictionary が生まれる。入江祝衛編『詳解英和辞典』*A New English-Japanese Dictionary* (博育堂) がそれである。本文 1,427 頁。附録は 255 頁，その内容は『和訳英字彙』や『和訳字彙』にある項目に加えて，「形容詞比較要覧」(9 頁)，

「接頭語接尾語及根語略解」(35 頁)「前置詞用法」(43 頁) が収録されている。ここにも示されているように，本書は「語学本位」の立場で英語研究者を対象に編集されたものであって，'学習辞典' 的特色が豊富である。意義区分も整序的で，必要な場合は語義を正確に理解さすための補足的解説または例句・例文が添えられている。底本は Whitney の *The Century Dictionary* という。→町田俊昭 (1971)

例:

Humanity, ①人類 (集合的ニ). ②人性，人道，人情. ③仁慈，仁愛，博愛 (性又行為ニ云). ④文学 (神学ニ対シテ蘇格蘭ニテハ拉丁文学ニ云フ. *pl.* 文学 (集合的ニ. 即チ博言学，修辞学，文法，希臘又羅馬古文学等ヲ包括ス).
must, *vi*, & *aux*. ①…ネバナラヌ，…可シ [例 *A man～eat to live*; *We～obey the laws*]. ②…ニ相違ナシ，…セズンバアル可カラズ，屹度…デアル，嘸…デアラウ [例 *He～be a hero*; *How beautiful it～be!*]. [註] 古語ニテハ意味ノ曖昧ヲ来サヾルトキハ must ノ次ノ動詞ヲ略スコトアリ [例] I～away; "I～to Coventry"]. —～not,…テハナラヌ,…ス可カラズ，勿レ [例 *You～not smoke here*].

5.2 大正改元まもない 9 月に出た市河三喜著『英文法研究』は，わが国の英語学研究がいよいよ科学的レベルに達したことを示すモニュメントであった。英和辞書史の上でも記念すべき辞典が 2 種同じ大正 4 年 (1915) に出版されて，それぞれの特色をもって広く愛用された。井上十吉著『井上英和大辞典』*Inouye's English-Japanese Dictionary* (至誠堂，本文 2,326 頁) がそのひとつである。大正 12 年震災に遭うまで 121 版を重ねている。他のひとつは齋藤秀三郎著『熟語本位英和中辞典』*Saito's Idiomological English-Japanese Dictionary* (正則英語学校出版部日英社，上下 2 巻本文 1,594 頁) で，昭和 2 年 (再訂版) で 190 版発行されている。

日本の英和辞書の歴史は，これ迄見て来たとおり，英米の辞書を単数か複数か底本とし見出し語・綴字・分節法・発音・語義解説・語法・用例・位相 (stylistic values) 等の情報を全部ないしほとんど依存し，訳語や訳述の様式を先行英和対訳辞書に仰ぐ，といった編集方法が普通である。従って，英米における lexicography の成長と発達が，ただちに日本の英語辞書の性格や価値を決定的に支配するといっても過言ではない。これが日本の英和対訳辞書編集の真相である。

1911 (明治 44) 年は，Oxford University Press によって *The Concise Oxford Dictionary of Current English* Adapted by H. W. Fowler and F. G. Fowler, Authors of 'The King's English', from The Oxford Dictionary の刊行された年である。*COD* が井上と齋藤の辞典に多かれ少かれ影響を与えているのは自明の理である。その特徴を簡潔にいえば，Webster 系の百科事典的内容から 'ことば' の辞典へと変化したということであろう。

Fowler 兄弟の *COD* 編集の方針としては，Preface に述べられているとおり，*OED*

に用いられた 'revolutionized lexicography' の原理に基づき，事典的情報を排して語・句の用法を明らかにすることを主旨とする。具体的には，①常用語 (Common Words) とその 'idiomatic use' を重視すること，従って，前置詞，接続詞，代名詞や hand, way, go, put のような 'simple' な語に充分なスペースを与えること，②語義を明確にするために用例を豊富に取り入れること，③ 'colloquial' な用例を採用すること，④語義配列の順序は論理的相関性，語義間の親近性や重要性を原則とすること，などが挙げられよう。

こうした方針で出来上った *COD* を底本として見出し語・語義配列・用例を全面的に踏襲したものは『井上英和大辞典』である。「取材の広汎」「訳語の的確」「専門術語の考究」(自序) はもちろんであろうが，*COD* 初版は最も忠実なる使徒を『井上英和』に見出したと評してよい。たとえば『井上英和』p. 534 は小見出し語 dis-pleas′ing (dis-plēz′ing) から同じ小見出し dis″pu-tā′tious-ness (dis″pu-tā′shus-nes) まで 32 語載っているが，この語間の *COD* の収録語数と 28 語は同一であり，用例もほぼ等しい。(追加 4 語 dis″-pro-por′tion *vt*. dis′pu-tant *n*. と *a*. dis-pu′ta-tive *a*.) *COD* の語源欄が除かれているのは，今日から見れば惜しい。本国人向けの *COD* の見出し語には欠けた分節をほどこし，primary accent と secondary accent を加え，さらに ( ) に前掲の発音表記を付したのは『井上英和』の有用性をいっそう高めたといえる。

5.3 『熟語本位英和中辞典』は，*COD* と同じく B 6 判で，装釘もそっくりで出版された。*COD* の影響を，lexicography の点からみて，『英和中辞典』が少なからず受けていることは事実としても，「又一方 Saito 中辞典は Saito Idiomology の集大成である。'齋藤文法' は全巻に充ち満ちている。英語の文章構造 (特にその名詞構文と他動詞構文) に相応ずる邦訳文の定式化，訳語の洗練—これらは COD の与り知らぬところである。これらは全く Saito の Originality に帰すべきものである。Saito 中辞典は COD の出現がなくても出版されたものであった。」→大村喜吉 (1960) p. 430. 永嶋氏の綿密な研究の結論も同じ方向である。→永嶋 (1970) pp. 202-215.

成句・文例の引用という点で，『英和中辞典』には，Ernest M. Satow & Ishibashi Masakata: *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*, Yokohama, 1904[3] (明治 37 年) が大いに参考にされた証跡がある。→石井光治 (1974)

『井上英和』で比較した *COD* の見出し語 displeasing～disputatiousness の 28 語で『英和中辞典』は displeasingly, displume, disposability, dispossessor, dispraise *v*. *t*. & *n*., disproportioned の 7 語を削り，**Dis-posed′** (ディスポーゥズド) [過分] を加えて，「**I am disposed to** (=*have a mind to*) undertake the work. (引受ける) 気がある。」ほか 3 文例を添え，しかも paraphrase による双解方式を随所に用いて，英語学習者に必要な情報を，充分なスペースで与えている。「'**To dispose of** a daughter **in marriage** (**to** some one). 娘を (何処へ) 片付ける。」などの語の連接関係を明示する例文を豊富につけ加えていることも『英和中辞典』の一大特色である。

本書の欠点と思われることは，発音表記で，前付けに「発音記号」解説があって，Webster 式 diacritics と齋藤の工夫に成る片仮名発音との対照が示されているが—たとえば

ä アー **fä'ther** (**ファー**‿ヅア〜), **l** ‿ラ行 **lake** (‿レーィク); **will** (ウイ‿ル), **th** (清音) ‿ヅア行 **think** (‿ヅィンク) のように一前者の心得がなくては正確な発音は期しがたかろう。昭和 11 年の増補新版 (豊田実増補) では, 片仮名発音は国際音標文字 (IPA) を用いた Jones 式に改められ, さらに昭和 27 年新増補版で巻末に 72 頁が追加され, 現行のものとなった。

本書の特色として付け加えるべき 2 点がある。のちに A. S. Hornby 他編の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (開拓社, 昭和 17 年) で, 組織的に採用された 'countable', 'uncountable' の名詞用法指示が,『英和中辞典』では [普名] [固名] [集名] [質名] [抽名] といった区別で行われている例が多いこと。また動詞については, 自・他の区別のみならず, dative verb, dative construction, factive verb, factive construction, 使役 (助) 動詞, 補言的他動詞, 過去分詞附他動詞, 不定詞付他動詞, root 附他動詞, 補言附不完全他動詞, 不完動詞, 不定詞附不完動詞, 分詞附不完動詞など (get, have, make を参照) と, 一貫性は多少欠けているけれども, 徹底すれば Hornby の 'Verb Pattern' にまで到達する文型認識を,『英和中辞典』がすでに内蔵していること。Verbal phrase, verb+adverb combination, verb+preposition, adjective+preposition などに, "Words are nothing in themselves, everything in combination;" (『携帯英和辞典』日英社, 1922, Preface) を標榜する齋藤英文法の精髄が『英和中辞典』に集大成されているといってよい。

大正 10 (1921) 年に第 1 巻を刊行しながら震災のため, 昭和 7 年に完成が持ち越された藤岡勝二著『大英和辞典』*A Complete English-Japanese Dictionary* (大倉書店, Vol.1 (A-L) 本文 1,638 頁, Vol. II (M-Z) 本文 1,984 頁) は, 収録語数約 17 万の大著である。東京帝大言語学科の藤岡博士を中心に, 前田太郎, 佐久間鼎等の協力によって成った辞典であるが, 第 1 巻に Jones 式発音記号を採用していることは, 日本の英和辞書として最初のもので, lexicography の上でも重要な事実である。

例:

la'bi-o-den'tal (leibio*u*dentl [-bjo*u*-]), lab'o-ra-to-ry (læbərətəri) [ləborət-]) lab'y-rinth (læbərinθ [-bir-]), lach'ry-ma tion (lækrimeiʃən).

1922 (大正 11) 年は, H. E. Palmer 来朝の英語教育史的にも記念すべき年である。ポケット版辞書の代表ともいうべき『袖珍コンサイス英和辞典』(神田乃武・金沢久共編, 三省堂, 684 頁) はこの年に生まれた。この小型辞書は Webster 系の流れに属するものだが, Webster 式注音符を捨てて, Jones 式発音符号を採用した。「コンサイス」の普及とともに, この発音表記が一般化することとなる。

6. 英和辞書の発達 (昭和期)

6.1 通史的にみると, まず昭和 2 年刊行の岡倉由三郎編『研究社新英和大辞典』*Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary on Bilingual Principles* (初版本文

2,031 頁，附録 17 頁）が出た。再版 1936，第 3 版 1953，現行第 4 版 1960 が続く。初版は，*COD*[1] の編集方針にのっとり，同書を主な資料源として出版された。従来の英和辞書と比べて目立つ特色は① Jones 式発音表記の採用，②語義について 'Bilingual Principles'（双解方式）を採用，③語源記述の採用，の三つである。このうち語源解説は本書が初めて取り入れた試みである。再版には当時（1932）出た Wyld の *UED*，第 3 版には *The American College Dictionary* (1947)，—このため百科事典的性格が加わり，発音は米主英従となった—，第 4 版には Jones の *English Pronouncing Dictionary* (1958[11])，*Webster's New World Dictionary* (1957)，Partridge の *Origins: A Short Etymological Dictionary of Modern English* (1958) などが大いに参考にされた。発音は英主米従となり，百科事典的特質はますます強化され，折衷的性格を濃厚にしながら，机上辞典としての成熟度を高めている。4 版の収録語数約 14 万。

昭和 3 年に三省堂編輯所編纂『三省堂英和大辞典』*Sanseido's Encyclopaedic English-Japanese Dictionary* が出る。英文タイトルどおり，三省堂辞書のモットーとする百科全書的辞典の集大成である。学術専門語の訳語決定を重視し，各分野の学者百名余の参加を求めた。もちろん明治・大正の lexicography が生かされ，近代常用英語・古語・俗語・俚語・卑語・方言の蒐集，語義分類と配列・綴字・分節・語形変化・慣用語・用例・図解・表示などに遺漏はない。ただ発音については，主強勢・従強勢は示されているが，Jones 式発音表記は採用されず，修正 Webster 式 diacritics によることを原則として，黙字・同化音のある場合は，円括弧内に示す。

例:

lā″bĭ-ō-dĕn′tal (-tl*), lăb′ŏ-ra-tō-rȳ, lăb′ȳ-rĭnth (′læbə-*) lă-ϵ″rȳ-mā′tion (-′shun). *は IPA への転写の便を計るための印.

語源は必要な場合に簡略に示されている。本文 2,634 頁，附録（英米常用他国語句・略語表他）46 頁。

6.2 昭和初年は多産な年で，昭和6年にさらに大冊の英和辞典の誕生を見る。市河三喜・畔柳都太郎・飯島広三郎共著『大英和辞典』*Fuzambo's Comprehensive English-Japanese Dictionary*（冨山房，本文 1,840 頁，附録（略語表）15 頁）である。「はしがき」によれば，英米の辞書を直訳した対訳辞書から「一歩進んだ我国人本位の英語辞書」を期して，編集の業は明治 37 年に始まり，大正 14 年に原稿が完成したものという。内外の英語辞書 30 余種を参考，見出し語は *COD* および *Funk & Wagnalls Practical Standard Dictionary* を標準にした。収録語数約 141,200（固有名詞 8,411 語を含む），成句・熟語 3 万 3 千，文例 46,500 余（沙翁および *A.V.* からの引用に富む。発音表記は Jones 式 IPA に基づき，多少の変更（accent を母音直上につける）を加えてある。前付けに「音標文字および発音略解」がある。例: la″bi-o-den′tal (lèibio*u*déntəl), lab′o-ra-to-ry (lǽbərətə-ri), lab′y-rinth (lǽbirinθ), lach″ry-ma′tion (lǽkriméiʃən). 昭和 26 年修訂増補が出て，巻末に 'New Words Section' を加えた。

6.3　昭和11年に出た島村盛助・土居光知・田中菊雄共著『岩波英和辞典』*Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary* も，積年の学究の産物で，*OED*の精髄をこの小型辞典に盛りこむことを期し，語義分類と排列の順序は‘歴史的原理’に基づいて行ない，用例約2万を *OED* から採録した。「新増訂版」が昭和26年，「新版」が33年に出た。新版の収録語数約6万，発音は Jones の *EPD* 11版 (1956) による。

昭和16年の岩崎民平編『簡約英和辞典』*Kenkyusha's Concise English-Japanese Dictionary* (本文1,805頁) は，『研究社英和大辞典』の系統を引く中型机上辞典であるが，基本語，文法的機能語を特に重視した語学・学習本位に出来たすぐれた特色があった。昭和31年に『新簡約英和辞典』(見出し語約8万，2,167頁) と改まったが，今は絶版となった。

しかしその学習辞典としての特色は，『新英和中辞典』*Kenkyusha's New Collegiate English-Japanese* (1967[1]) に全面的に引きつがれているとみてよい。

(昭和54年8月成稿)

引用文献

土井忠生 (1971)『吉利支丹語学の研究』三省堂.

Gray, J.C. (1963) *Words, Words, and Words about Dictionaries.* San Francisco: Chandler Publishing Company.

林　哲郎 (1968)『英語辞書発達史』開文社.

井田好治 (1963)「薩摩の英学(一)—その前史と「薩摩辞書」—」(『鹿児島大学文理学部文科紀要』第12号)

——— (1977)「吉雄権之助編『蘭・英・漢三国語対訳辞典』の発見とその考証」(『横浜国立大学人文紀要第2類　語学・文学』第24輯)

石井光治 (1974)「E. サトウ原著『英和口語辞典』」(『関西外国語大学研究論集』第22号)

板沢武雄 (1959)『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館.

岩崎克己 (1935)『柴田昌吉伝』一誠堂書店.

町田俊昭 (1971)『三代の辞書—英和・和英辞書百年小史—』三省堂.

森岡健二 (1965)「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響」(『東京女子大学比較文化紀要』第19巻.

永嶋大典 (1968)「英語辞書の発達(一)英和辞書」(『日本の英学100年　明治篇』)

——— (1970)『蘭和・英和辞書発達史』講談社.

大村喜吉 (1960)『斎藤秀三郎伝—その生涯と業績—』吾妻書房.

惣郷正明 (1973)『英和対訳袖珍辞書』解説，秀山社.

鈴木　博 (1968)『蘭語譯撰』解題，臨川書店.

豊田　実 (1939)『日本英学史の研究』岩波書店.